

天眼鏡

もう一つの畜産 養蜂

養蜂、はちみつの生産は畜産に分類されていることをご存じない方も多いのではないだろうか。産業別生産物分類リストなるものを見てみると、日本標準産業分類の012が「畜産農業」となっており、その生産物リストの分類コード9に間違いなく「はちみつ」が明示されている。筆者も10年程前に、その”事実“を知って驚いたことを今でも覚えている。

これまで仕事で養蜂と関係したことはなく、個人的な経験等から養蜂をイメージするにとどまっていたが、あるお付き合いの関係から、この6月、養蜂GAPの作成に絡んだ委員会に参画するようになった。これがきっかけとなってはじめてまともに養蜂やはちみつについての生産等構造を調べる必要性に迫られたもので、養蜂も日本の農業や畜産一般と本質的には類似していることを認識させられた。

せっかくの機会でもあり、その概略をご紹介しますと、はちみつの生産は2,826トンで自給率はわずかに6.9%にすぎない。消費されるはちみつのほとんどは輸入によって賄われているわけだが、輸入量の大半は中国に依存しており、中国からの輸入割合は70.8%にのぼっているというのが実態である。

消費量は1985年の35,272トンが2018年には47,329トンと、33年で1.34倍に増加しており、トレンドとしては増加基調にある。しかしながらこの20年ほどの動向を見てみると、2005年に45,919トンまで増加したものの、その後減少・停滞を続け、2015年には39,058トンと4万トンを切った。ところが2016年には「消費者による蜂蜜の使い方の広がり等から増加し」51,166トンと急増したが、近年は横ばい傾向にある。はちみつの需要はかなり不安定であることが見て取れる。

一方、はちみつを生産する飼育戸数を見てみると、1985年に9,499戸であったものが、2019年は9,782戸と横這い状態にある。しかしながら農水省資料をよく見ると「2013年以降は改正後の養蜂振興法に基づく

届出数」と注書きがある。2012年が5,934戸で、翌年の2013年は8,312戸と3,000戸以上の開きがあることを勘案すると、実質的には一時減少したものの、近年横這いから若干の増加を辿りつつあるようにも推測される。

こうした動向に関連して若干筆者の身近での見聞等を付記しておく、10年程前、ある社会人を対象にした大学校で講義を受け持っていた時のことであるが、学生の受講希望者が多い講義は、数ある科目の中で「養蜂」が一番であることを聞いて耳を疑ったことがある。

そしてほぼその頃のことであるが、自然栽培の産地化で知られる石川県羽咋市に足を運び、自然栽培の畑地を見学していたところ、40歳前後の女性が畑の横に車を置き、畑の周辺を行ったり来たりしていた。その女性に何をしているのか聞いたところ、養蜂をしているとのこと。さらに聞いてみると、埼玉から毎週末、養蜂のために通っており、羽田と小松間を飛行機で往復し、小松と羽咋の間はレンタカーを使い、車で寝泊まりしているという。疲れはなく、羽咋市で養蜂をすることでエネルギーをもらって都心での仕事が続けられていると語る。

養蜂の世界も高齢化が進行し担い手不足が顕在化しているが、一方で養蜂に関心を持つ若い人たちは増加しており、担い手に参画しつつある人たちも少なくない状況にあるようだ。そして耕作放棄地が増加している中で、養蜂の蜜源は減少傾向にあるともいわれる。

耕作放棄地に花木を植えて蜜源にし、養蜂に参入したいという若い人たちをつなげていく延長線に、林間放牧等と連携し複業化することによって、畜産の世界でも若い人たちへの扉をもっと広げられないかと夢想したのである。

(農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一)